沼津市明治史料館通信
二〇二一年十月
通巻147号

■ぬまづ近代史点描84
描かれた沼津八景
■江原素六とその周辺62
女婿福井菊三郎と海軍中将小倉鋲一郎

沼津八景
（伊豆市牧之郷飯田家所蔵）
上段：千本松嵐　　下段：香貫山秋月

ぬまづ近代史点描 84

描かれた沼津八景

「八景」とは、ある地域の優れた景色を評価し、景勝地としての八つのシーンを選定したものである。一〇世紀の中国、北宋において選ばれた瀟湘八景（湖南省にある洞庭湖の南方）が起源で、それをモデルとして台湾・朝鮮、そして日本でも八景が選定されるようになった。日本では中世以降、現代に至るまで、全国各地で四〇〇以上の八景が生み出された。特に江戸時代に選定されたものが多く、漢詩や浮世絵の題材にもされた。現代においては、観光資源として利用されており、沼津市の場合も昭和三二年（一九五七）と五八年（一九八三）に市と観光協会によって「沼津新八景」が選定されている（『沼津市誌』中巻、『沼津市史　通史編　現代』）。

また、八景以外にも、四景、十景、十二景、十八景といったパターンもあった。沼津では、明治一〇年（一八七七）頃に漢詩結社芙蓉吟社によって選ばれた八景、「富岳晴雪」「牛洞漁火」「港橋残月」「鷲峰帰雲」「蓼原蛇松」「鞠祠落葉」「松湾飛鴎」「黒瀬流蛍」に、後に「赤瀬櫓声」「長谷春賽」が加えられ、十景になったという（『沼津市史叢書八　沼津史料』）。沼津十二景は和田鷹峰（伝太郎）の和歌による。さらに大正六年（一九一七）以前には、漢詩家三島中洲によって「沼津十八景」が考案された（『静岡県駿東郡誌』）。局地版ともいうべき、「牛臥八景」が東宮侍講川田剛らによって選定されたこともあっ

▲ 川口帰帆

愛鷹帯雲 ▲

▲ 蛇松夜雨

◀ 我入道泊舟

た（『沼津市誌　全』）。通横町の菓子店河内庵森川太吉が、沼津八景を煎餅にして売り出したとされ、すでに明治中期には観光に活用されていた。戦前発行された絵葉書のシリーズ名にも「沼津八景」は使われているが、その絵柄には停車場・御用邸・御成橋など近代になってからの風景・建物が取り入れられている（『絵葉書にみる沼津の名所』）。

▲ 大渡市烟

▼ 観音花靄

そもそも、明治以降の八景や戦後の新八景のもとになった、オリジナルの「沼津八景」は、江戸時代後期、沼津藩主水野忠友が選定させたものであり、その題は、「千本の松風」「観音の花靄」「我入道の帰帆」「愛鷹の帯雲」「川口の泊舟」「大渡の市烟」「香貫山の秋月」「蛇松の夜雨」というものだった。後に沼津藩士の画人水野謙斎（鈴木謙斎）がその図を描き、牛臥で旅館三島館を営んだ世古家がそれを秘蔵したという（『沼津市誌　全』）。

さて、ここに画像を紹介したものは、絵画に描かれた「沼津八景」である。伊豆国田方郡牧之郷村（現伊豆市）の素封家・文人の家だった飯田家に伝来したものである。謙斎が描いたことを示す署名は見当たらないが、同家には他に謙斎の画幅などが所蔵されていることから、その可能性はある。ただし、世古家秘蔵とされたものと同じものか否かはわからない。絵に付された題は、「川口帰帆」「愛鷹帯雲」「蛇松夜雨」「我入道泊舟」「香貫山秋月」「大渡市烟」「千本松嵐」「観音花靄」であり、若干の異同がある。天保五年（一八三四）に藩士の身分を捨て、以後風流の道に生きた謙斎は、明治初年に伊豆国君沢郡古奈村（伊豆の国市）で没したとされるので（『近世・近代ぬまづの画人たち』）、もし彼の作であれば、それ以前の、たぶん幕末に描かれたことになろう。

（樋口雄彦）

江原素六とその周辺　62　女婿福井菊三郎と海軍中将小倉鋲一郎

江原素六の長女なつ子（夏、一八七五～一九七四）は、父の影響でキリスト教主義の私立静岡女学校（後の静岡英和女学院）に入学した。在学当時は「沼津の三小町」の一人と称された美少女だったという（松縄善三郎「旧幕臣の娘たち　江原（福井）夏のこと」『季刊静岡の文化』第七六号）。

そして、なつ子が明治二六年（一八九三）に嫁いだのが実業家福井菊三郎（一八六六～一九四六）である。福井は、東京商法講習所（現一橋大学）に学び、三井物産に入社、シンガポール・香港・大阪・ニューヨークの各支店長などを歴任し、常務取締役となったほか、三井合名会社常務理事や三井銀行・三井鉱山・日本郵船会社の取締役、三井報恩会理事などもつとめ、三井財閥の中で重きをなしたことで知られる。第一次世界大戦後のパリ講和会議派遣団の一員に加わったこともあった。後年は「資性謹直、思慮周密」、「円満なる君子人」（『大正人名辞典』）と称された福井であるが、結婚前は「放逸にして艶名東西の花柳に振ふ」との評判もあった。なつ子に求婚した際は、彼女から「芸者狂をせ

ぬとお誓ひ遊ばすなら、妾は両親を納得させて此縁談に応じます」と迫られ、その「条約」を承諾することで結婚に至ったのだという（『名士奇聞録』）。

さて、菊三郎は福井家の養子に入った人であり、実は東京府平民中村万吉の五男だった。そして、その中村家とは御畳方として幕府の御用達をつとめた家だったらしい。江原が菊三郎について語った、「彼は江戸つ子で実家は麹町三丁目にある、代々幕府の畳方を勤めた旧家で、今でも御所の畳を納めてゐる筈である」（『東京朝日新聞』大正七年一一月二九日）という証言がその根拠となる。中村万吉は大正一五年（一九二六）時点で東京神田区元岩井町に住んでおり（東京都公文書館所蔵文書）、幕末の武鑑に幕府御畳方として「かんだいわい丁　中村弥太夫」（慶応二年『大成武鑑』など）と掲載されているのが、姓と住所が一致することから、その先祖であると推測される。

福井菊三郎
（『大正人名辞典』所収）

福井菊三郎は昭和戦前期、旧幕臣の親睦団体・葵会の会員や、旧幕臣・静岡県出身者の奨学団体・静岡育英会の終身会員になっていたが、それは江原の娘婿だったからというよりも、自身が幕府にゆかりを持つ家の出だったからなのかもしれない。葵会の会員資格は、「幕府ノ旧臣及其ノ子孫」のみならず、「幕府ニ縁故アル者及其ノ子孫」とされており（『葵会会則並会員名簿』）、商人だった中村家も幕府に縁故を持つ家として認められたのであろう。

ところで、どういう理由か不明ながら、中村万吉は娘二人を、幕末にオランダに留学した幕臣で、留学生仲間榎本武揚とともに箱館戦争を戦い、その後は海軍兵学寮教官などをつとめた沢太郎左衛門の養女にした。菊三郎にとっては姉妹にあたる。そのうち錫という名の女性は、明治一四年（一八八一）に海軍士官小倉鋲一郎（一八五三～一九二八）と結婚した（防衛省防衛研究所所蔵資料）。姉妹のもう一人は、三井組社員斎間某に嫁したという（「故沢太郎左衛門氏の略歴」『同方会報告』第九号）。小倉も旧幕臣であり、少年でありながら箱館戦争に参戦したことでも知られ、後に日清・日露戦争に従軍、海軍中将にまで昇進した。

小倉は、福井菊三郎が結婚する際に「姉婿」として相談され、「江原の娘なら」是非とももらったほうがよいとアドバイスしたという（前掲『東京朝日新聞』）。静岡藩での抜擢や、沼津での教育・産業への取り組み、そして衆議院議員への当選など、陸軍と海軍の違いなどから旧幕時代に面識はなかったとしても、小倉や沢もその頃になれば江原の名声を聞き知っていたはずである。ちなみに、偶然なのか鋲一郎の小倉家は、江原家と同様、幕府に仕えた黒鍬者の家系だったという（松平太郎『江戸時代制度の研究』）。

小倉は明治四〇年（一九〇七）一〇月に開催された、沼津兵学校出身者の同窓会である沼津旧友会の例会に出席したことがあったが（「沼津兵学校沿革（七）」『同方会誌』44）、正規の会員ではなく、あくまで臨時参加したのであろう。ただし、箱館で降伏・赦免後には静岡藩に帰参し、浜松勤番組に属したほか、英学修業のため沼津に遊学していたという事実もあるので（『明治初期静岡県史料』第四巻、「鉉一郎」は誤植であろう）、ひょっとすると沼津兵学校附属小学校で学んだのであろうか。

江原は、右の新聞記事以外にあまり書いたり語ったりしていないようだが、福井を介して、小倉鋲一郎や沢太郎左衛門ら幕府海軍出身の有名人と姻戚関係でつながっていたのである。

（樋口雄彦）

令和３年度第１回企画展
地域の歴史シリーズ２
「かなおか」
令和3年11月13日(土)から
令和4年1月30日(日)まで開催
ご来館おまちしております。

沼津市明治史料館通信
第147号
令和３年10月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社